

人生は愛と友情と、
そして裏切りとで
できている

西村京太郎

インタビュー
重田玲

伊豆・湯河原にある西村京太郎記念館にて。

「あいにくの雨なのに、来館者がたくさん」

「ありがたいですね」

トラベルミステリーの先駆者として孤高の地位を築いておられる作家の西村京太郎先生。二〇一二年に著書五〇〇冊を突破し、現在は五五〇冊くらいなのだとか。そのほとんどが五〇歳を過ぎてから執筆した本というから驚く。今なお精力的に執筆をされている、その秘訣を伺った。



目次

第一章	ベストセラーは「ふっ」としたきっかけ……………	7
第二章	自分ではできるといふ根拠なき自信だけがあった……………	21
第三章	戦争で仲間がどんどん死んでいく……………	39
第四章	マツカーサーのせいで大学に行けなかった……………	53
第五章	京都のほうがおもしろいだろうと、環境を変えた……………	67
第六章	五〇〇万円の収入が五億円になった……………	85
第七章	家を買ったけど騙されちゃって……………	105
第八章	各駅停車に乗って一人旅をしよう……………	121



東京駅でブルートレインを撮影している子どもたちを見て電車を使ったミステリーを書き始めた。そして『寝台特急殺人事件』がベストセラーに。

第一章

ベストセラーは“ふっ”としたきっかけ

本が売れて編集者が喜んでいってというのはわかるんだよね。それが嬉しかった。

「お子さんからご年配の方まで、西村先生のファンは年齢層が幅広いのがとても印象的です」
「ありがたいですね。僕の場合は本だけでなく、テレビドラマで知ってくださった方も多いでしょう。特にお若いファンの方は、そうかもしれません」

「先生は、日曜日はいつもこの記念館^(*)で、来館者の方々をお迎えになられるんですか？」

「そうですね。だいたい、この記念館の中のカフェの端っこでお茶を飲みながら、お客様とお話をさせていただいたりしています。隣が自宅ですから、二、三分で来られます」

「先ほど、記念館の二階を拜見させていただきました。五〇〇冊を超える著書が並んでいる様子は荘厳というか……、思わずため息が出てしまいますね。著作の多さでは赤川次郎先生の名前がよくあがりますが、西村先生の場合、そのほとんどが五〇歳を超えてから、というのもすごい点です。今は、ひと月に何本くらいの物語を書かれるのでしょうか？」

「今は連載を三本くらいかな。でも、少ないほうですよ」

「三本でも少ないんですか？　すごいバイタリテイですよ」

「ありがとうございます。十津川警部との付き合いも、気がつけば、三七年目になりました」

(笑)。ずいぶん経ちましたね」

「西村先生の代名詞ともいえるトラベルミステリー、十津川警部シリーズの主人公、十津川省三警部がわしよせうです。シリーズ最初の作品である『寝台特急殺人事件』は、一九七八年に刊行された作品ですよ」

「そうです。初めてベストセラーになった作品ですね」

「西村先生が一躍、人気作家の仲間入りをされたのは、この作品がキツカケですよ」

「はい。でも実は、作家として初めて賞をいただいたのは三二歳のときです。オール讀物推理小説新人賞をいただきました。その二年後に、『天使の傷痕』という作品で江戸川乱歩賞（*2）をいただいたのですが、そこからすぐには売れなくて」

「『寝台特急殺人事件』が一九七八年ということは……、江戸川乱歩賞を受賞されたあと、一〇年近く、大きなヒット作品がなかったということでしょうか？」

*1 西村京太郎記念館：二〇〇一年湯河原に開館。西村京太郎氏の著作物のほぼすべてが展示してある。そのほか、八〇〇系や七〇〇系の新幹線の鉄道模型などがジオラマになっている。

*2 江戸川乱歩賞：江戸川乱歩の寄付を基金として日本推理作家協会により制定された。現在では推理作家への登竜門となっている。西村京太郎氏は、第二一回（一九六五年）に「事件の核心」（後に『天使の傷痕』に改題）で受賞。

「そうですね。ですから、自分で書いておいてなんなのですが、作家ってなにが売れるかわからないですよ(笑)」

「五〇〇冊以上書かれています西村先生がおっしゃると、重みが違います(笑)。自分が良いものを書いた、と思っても、それが世の中で売れるかどうかというところからないですよね」

「そうですね。乱歩賞を取って、その後の売れなかった一〇年は、試行錯誤でしたね」

「その頃のミステリー作家さんといえば、どういった方がいらっしゃったのでしょうか」

「やはり、松本清張まつもとせいちょうさん、黒岩重吾くろいわしげごさん、佐野洋さのようさんといった文壇の大御所といわれた方々でしょうか」

「そうそうたるメンバーですよ。特に松本清張さんは、ミステリーはもちろん、ノンフィクションや評伝など、幅広く活躍された日本を代表する作家です。先生にとって、書いても書いても初版どまりの一〇年というのは、不遇の時代といえるのでしょうか？」

「そうですね……。そういえば当時、有名な編集者がいてね。後に講談社で少年マガジンの編集長になった、非常に有名な編集者なんですけれども。一度、知人の紹介でご挨拶がてら、

お会いしたんですよ。すると、『俺は松本清張さんだって直させるんだ』って、妙に威張っているんですよ。いくら人気作家であっても、自分が気に入らなければ訂正させると。当時はそういう人がいたんですよ」

「なんだか、ずいぶん上から目線というか……。やっぱり、作品の内容だけでは評価されないなと思う出来事は、ありましたか？」

「昔あったのは、僕がとある雑誌に三〇〇枚くらい、一挙に掲載してもらったことがあったんです。でもね、発売された表紙に僕の名前は載っていないわけ。それにくらべて、直木賞作家の池波正太郎さんいけなみしょうたろう*、彼の名前はドンと大きく載っていた。ちょうど、池波さんは病気で一時

*3 松本清張：一九〇九～一九九二年。一九五三年、『或る「小倉日記」伝』で芥川賞受賞。歴史小説、現代小説、推理小説、ノンフィクション、評伝など広いジャンルに旺盛な創作活動を発揮した。代表作に『ゼロの焦点』『砂の器』『日本の黒い霧』『昭和史発掘』等。

*4 黒岩重吾：一九二四年～二〇〇三年。一九六一年、金ヶ崎が舞台の『背徳のメス』で直木賞受賞。その後も金銭や権力にとらわれた人間の内側をえぐる社会派推理を書いて一世を風靡した。

*5 佐野洋：一九二八年～二〇一三年。一九五九年、読売新聞社在籍中から作家として活躍。大がかりなトリックなどを排した知的なミステリーを賣いた。

的に休養をしていたようで、それから復活されたのが、僕とちよつど同じ号だったようなんです。でも、彼の原稿は三〇枚、僕は三〇〇枚書いているのに、こんなに扱いが違うのかと。いやあ、厳しいなと思いましたがね」

「やはり、肩書きや実績が一番に評価されるのでしょうか。それでも、『寝台特急殺人事件』で一躍人気作家となるわけです。列車を使ったトリックを軸にしたミステリー、いわゆるトラベルミステリーを思いつかれたのは、どういったキッカケなのですか？」

「あれはね、ある日ネタ探しにふらふらと東京駅に行ったとき、駅のホームに群がるたくさんの子どもたちを見つけたんですよ。なんだろうなと思ったら、彼らはみんな、一所懸命ブルートレイン（寝台特急）の写真を撮っていて。そこから、列車を使ったミステリーを書こうと思いついたんです」

「そうなんですか！ もう何年も温めてきたネタだったのかと思っていました」

「そういうわけじゃなかったんですよ。それこそ、当時は原稿を書いても書いてもダメで、『書く前に粗筋あらすじを持ってきてください』なんて、編集者にいわれていました。そんな中で、先

ほどのトラベルミステリーネタがOKをもらえた、というわけです」

「意外と、ふとしたキツカケでベストセラーシリーズが誕生したのですね……」

「そうなんです。実は、列車を使ったミステリーがどうしても書きたかったというわけではなかったんですね。最初は、この一作で終わるのかと思っていました……」

「え、そうだったんですか？」

「そう。一冊目が売れたからほとんどシリーズで出すことになって、それが売れ続けていったんです。だから、出版社の人と打ち合わせをしていて、『今度はトラベルミステリーじゃなくてこういうのを書きたいんだよね』と打診してみても、『いやあ、先生。それは非常におもしろいお話ですね。でもほかの出版社でやってください』といわれちゃうんです(笑)。結局、トラベルミステリーしか書けなくなっちゃいましたね」

「そうなんですか(笑)。ちなみに、列車のミステリー以外では、どんなお話が書きたかったのですか？」

*6 池波正太郎…一九二三年～一九九〇年。東京生まれ。『鬼平犯科帳』『真田太平記』といった戦国、江戸時代を舞台にした時代小説を発表し続けた。戦後を代表する時代小説、歴史小説作家として活躍した。